百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（4）

――『新古今集』「春歌上」巻頭の七つの歌群の構造について――

今川仁視

先の「予備的考察」（2）（3）〔本誌第四・五号〕では、『古今集』「春歌上」の巻頭の「立春」「残雪」「鶯」の三つの歌群の構造について考察し、その結果を基に、織田正吉氏が主著『絢爛たる暗号』（一九七八年）に発表された「百人一首」（小倉山荘色紙和歌）配列復元図の最も基礎的な骨格となっていた「風」の歌群の構造について検討した。

検討に際し、『古今集』の歌群の構造を基準としたのは、「百人一首」の構造を解明していく上で、松田武夫氏の名著『古今集の構造に関する研究』の「緒言」にある次の指摘が重要であると考えたからである。

・・古今集・・以後の勅撰和歌集乃至私撰和歌集、あるいは組織化された私家集などは、多かれ少なかれ、この古今集の構造の影響下に、自らを組織だてているのである。（『構造』六頁。）

『古今集』の歌の編集過程は、これまでの考察結果を要約すると次のような特徴をもっていた。

1　配当・組合せ・配列の三つの過程からなっている。

2　これら三つの過程を進めていくための基準は、〔歌群の主題を示す語句〕、〔その他の共通語句〕及び〔配列を示す一連の語句〕の三つである。

3　右の三つの基準によって編集された結果、各歌群に所属する歌の間には、三種類の共通の語句による関連＝連鎖が見られる。

この考察結果に照らすと、織田説は、歌の一首ずつの解釈と鑑賞にこだわるという和歌文学の伝統的な研究方法を抜け出て、百人秀歌と「百人一首」の歌が共通の語句をもちながら互いに関連＝連鎖していることに着目し、共通の語句を導きの糸として、表向きは歌人のほぼ時代順に並べられた二つの歌集の裏側の顔＝原型を明らかにしようとした点に、従来の「百人一首」研究には見られない優れた特徴をもっていた。しかし導きの糸が、歌群の表面的直感的な観察に制約され、**単なる**共通の語句にとどまっている点にその限界があった。

ところで織田氏は、もう一つの主著『謎の歌集／百人一首』（一九八九年）で、前著『絢爛たる暗号』で発表された「百人一首」の原型復元の正当性を裏付けるため、『新古今集』の歌群の中からいくつかの事例を援用されている。

そこで本稿では、まず『新古今集』「春歌上」巻頭の「立春」から「梅が枝の鶯」に至る七つの歌群の構造について考察し、『新古今集』の歌群が『古今集』の歌群の場合と基本的に同じ構造をもっていることを確認した上で、織田氏が『新古今集』の中から援用された歌群について検討し、「百人一首」のより現実的な原型を復元していくための参考にしたいと思う。

歌の本文は、『新古今和歌集』（岩波書店　新日本古典文学大系　田中裕・赤瀬信吾校注　一九九二年　以下、『新大系』と略称。）によっ

た。『新大系』の本文の底本は、伝冷泉為相筆本（国立歴史民俗博物館蔵）である。

『新古今集』「春歌」の歌群の区分については、久保田淳『新古今和歌集全評釈』第一巻などにも見解が提示されているが、それらの中では『新大系』の脚注の指摘が最も詳しいので、本稿ではこれを参考にした。但し、私と見解を異にするものが少なくないので、それらについては、その都度私見を記すことにした。

一　『新古今集』「春歌」の部の歌群

「春歌」は「春歌上」と「春歌下」の二巻に分かれており、前者には一から九八までの九八首、後者には九九から一七四までの七六首の計一七四首が収められ、これらの歌は、私の見るところでは次の二一の歌群に配当されている。

（巻第一　春歌上）

1	立春	一―	九	13	春雨	六四―	六七
2	若菜	一〇―	一六	14	青柳	六八―	七五
3	谷の鶯	一七―	一八	15	若草	七六―	七八
4	春雪	一九―	二二	16	桜	七九―	九八
5	余寒の月	二三―	二四		（巻第二　春歌下）		
6	水郷春望	二五―	二七	17	桜	九九―	一五七
7	梅が枝の鶯	二八―	三二	18	山吹	一五八―	一六二
8	春霞	三三―	三六	19	藤	一六三―	一六六
9	春の曙	三七―	三八	20	暮春	一六七―	一六九
10	梅	三九―	五四	21	三月尽	一七〇―	一七四
11	朧月夜	五五―	五七				
12	帰雁	五八―	六三				

二　「春歌上」巻頭の七つの歌群の構造

（一）「立春」の歌群（一―九）の構造

一　み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり
二　ほのぼのと春こそ空にきにけらし天の香具山かすみたなびく
三　山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水
四　かきくらしなをふる里の雪のうちに跡こそ見えね春はきにけり
五　けふといへばもろこしまでもゆく春を都にのみと思ひけるかな
六　春といへばかすみにけりなきのふまで浪間に見えし淡路島山
七　岩間とぢし氷もけさはとけそめて苔のしたみづ道もとむらん
八　風まぜに雪はふりつゝしかすがに霞たなびき春はきにけり
九　時はいまは春になりぬとみ雪ふるとをき山べに霞たなびく

右の九首の編集過程も、以下に見るように、配当・組合せ・配列の三つの過程からなっている。それぞれの過程の作業基準は次の通りである。

配当・組合せ―〔歌群の主題を示す語句〕〔その他の共通語句〕
配　　列―〔配列を示す一連の語句〕

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕　〔その他の共通語句〕

一　春はきにけり　　み吉野　山　かすみて　白雪
二　春こそ・きにけらし　　天の香具山　かすみたなびく
三　春ともしらぬ　　山　雪
四　春はきにけり　　ふる里　雪
五　もろこしまでもゆく春　　都　けふ
六　春・かすみにけりな　　きのふ　淡路島山
七　氷・とけそめ　　けさ　岩間

八　春はきにけり　……雪はふりつゝ　霞たなびき
九　春になりぬ　……み雪ふる　霞たなびく

右の九首のうち、まず一と二は、同じ〔歌群の主題を示す語句〕「春はきにけり」―「春こそ・きにけらし」をもっており、さらに「山」―「天の香具山」、「かすみて」―「かすみたなびく」という〔その他の共通語句〕を持っている、この二首は、こうした二種類の共通の語句を目安にして、「立春」の歌群に対として配当され組合わされたと考えられる。

次の三は、一と、「春ともしらぬ」―「春はきにけり」、「山」―「山」、「白雪」―「雪」という共通の語句をもっているので、一と二に追加されたと考えられる。

なお、三の「山」は、この歌群の中では、二の「天の香具山」を意味している。（理由については「予備的考察（2）」を参照のこと。）

四と五は、「春はきにけり」―「もろこしまでゆく春」、「ふる里」―「都」、六と七は「春・かすみにけりな」―「氷・とけそめ」、「きのふ」―「けさ」、「淡路島山」―「岩間」。最後の八と九は「春きにけり」―「春になりぬ」、「雪はふりつゝ」―「み雪ふる」、「霞たなびき」―「霞たなびく」という共通語句をそれぞれ持っているので、「立春」の歌群に対として配当されたのである。

なお、七の「岩間」は、この歌群の中では、六の「淡路島山」の「岩間」を意味している。

この「立春」の歌群に見られるように、『新古今集』でも、歌の組合せは、二首一対を基本とし、これに他の歌が追加されて小歌群を構成していることが多い。

小歌群の中で個々の歌が占める位置と、歌群全体の中の小歌群の位置を最終的に決めるのは、歌群の先頭歌と、この先頭歌に続く歌がもっている一連の語句である。

歌の配列を決める一連の語句は、ただ互いに連なっているだけではなく、歌群の先頭歌のもっている意味内容を物語の形で展開し、歌群の骨格となっている。

こうした一連の語句を骨格とする歌群の構造は、縦糸に横糸を通すと図柄が浮き出てくる織物に似ている。織物を織る場合、まず前もって縦糸を準備する。この縦糸に相当するのが、歌群に配当された個々の歌である。縦糸に横糸を通すことによって織物が織られ絵柄が浮き出てくる。その際、この横糸の役割を果たすのが、個々の歌の配列順を決める一連の語句である。

歌群内に配当された個々の歌は、先頭歌に続く歌がもっている一連の語句によって配列し、歌織物を織り上げるための素材である。歌織物は。個々の歌の作者とは別の、歌群の編者が、個々の歌を素材として織り上げた一種の創造物である。この歌群が表現する世界は、一首のそれを大きく超えている。

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

一　み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり
二　ほのぼのと春こそ空にきにけらし天の香具山かすみたなびく
三　山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水
四　かきくらしなをふる里の雪のうちに跡こそ見えね春はきにけり
五　けふといへばもろこしまでもゆく春を都にのみと思ひけるかな
六　春といへばかすみにけりなきのふまで浪間に見えし淡路島山
七　岩間とぢし氷もけさはとけそめて苔のしたみづ道もとむらん

八　風まぜに雪はふりつゝしかすがに霞たなびき春はきにけり
九　時はいまは春になりぬとみ雪ふるとをき山べに霞たなびく

右の「立春」の歌群の大意は次の通りである。

一　吉野は、里はもとより山も霞み、白雪の降っていたこのふる里にも春が来た。
二　天の香具山には霞がたなびき、
三　（その天の香具山の）春を待つ松の戸には、雪解け水が玉のように輝きながらとぎれとぎれにかかっている。
四　辺りを暗くして、冬のようにふる里に雪が降り続いているうちに、
五　立春の今日、春は、もろこしにまで渡って行くのだ。
六　淡路島はすっかり霞んでしまったが、
七　（あの淡路島の）岩間を閉ざしていた氷も今朝はもう解け始めたことだろう。
八　風まじりの雪にはなったが、
九　遠い山の辺りには霞がたなびいている。

右の配列の起点は一の「白雪のふりにし里」である。編者の視線は、二で「天香具山」に移り、三で、「天の香具山」の粗末な庵の戸にしたたりおちる雪解け水へ移っている。

編者の視線は、四で、ふたたび「かきくらしなおふる里」に向かう。編者は、五で思いを「もろこし」へ行く春に馳せ、六で手前に霞む「淡路島」へ、さらに七で、その「岩間」の雪解け水に思いを寄せている。

編者の視線は、八で再びふる里の「風まぜに」降る雪に戻り、最後の九で「遠き山べ」にたなびく霞に向けられている。

『古今集』の巻頭の「立春」に比べると、この『新古今集』の「立春」の歌群では、編者の視線は、春雪の降る「ふる里」を起点にして遥か遠い「もろこし」にまで及んでいる。

「立春」に続く「若菜」の歌群とは次の共通の語句で連鎖している。

九　春　み雪　山べ
一〇　春　あは雪　春日野

なお、『新体系』の九の脚注では、八・九の「二首は・・・次の残雪中の二首（一〇・一一）に移る繋ぎ。」と指摘されているが、『古今集』の場合と同様、『新古今集』でも、歌群の繋ぎをするのは一首である。「立春」の歌群の最後の九が、次の「若菜」の歌群の先頭歌一〇と共通の語句によって繋がれている。

（二）「若菜」の歌群（一〇―一六）の構造

一〇　春日野のしたもえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪
一一　あすからは若菜つまむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ
一二　春日野の草はみどりになりにけり若菜つまむとたれかしめけん
一三　若菜つむ袖とぞ見ゆる春日野のとぶひの野べの雪のむらぎえ
一四　ゆきて見ぬ人もしのべと春の野のかたみにつめる若菜なりけり
一五　沢におふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり
一六　さざ浪や志賀の浜松ふりにけりたが世にひける子の日なるらん

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕　〔その他の共通語句〕

一〇　春／したもえわたる草　　春日野　あは雪
一一　若菜つまむ　　野　雪　しめし
一二　若菜つまむ／草　　春日野　しめけん
一三　若菜つむ　　春日野の野べ　袖
一四　つめる若菜　　春の野
一五　若菜・つむ　　年　袖

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（4）

「一六　ひける子の日　……　ふりにけり

配当と組合せの方法については、先の「立春」の歌群で詳しく説明したので、この「若菜」の歌群以降については略記するにとどめる。

一〇・一一・一二の配当と組合せ

まず一一と一二が対として配当され、この二首の前に一〇が追加された。

一三・一四／一五・一六の配当と組合せ

右の二首ずつがそれぞれ対として配当された。

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

一〇　春日野のしたもえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪

一一　あすからは若菜つまむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ

一二　春日野の草はみどりになりにけり若菜つまむとたれかしめけん

一三　若菜つむ袖とぞ見ゆる春日野のとぶひの野べの雪のむらぎえ

一四　ゆきて見ぬ人もしのべと春の野のかたみにつめる若菜なりけり

一五　沢におふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり

一六　さざ浪や志賀の浜松ふりにけりたが世にひける子の日なるらん

歌群の大意

一〇　春日野の、人目にはつかないが芽吹いている草の上に、素知らぬ顔で春の淡雪が覆っている。

一一　標をつけた野に、昨日も今日も雪は降りつづいている。

一二　草が緑になった。

一三　雪のむら消えが、若菜を摘む人の白い袖のように見える。

一四　（そう言えば、かつて子の日に）形見として「かたみ（筐）」に若菜を摘んだことがあった。

一五　（あれ以来、）空しく年を積みかさねてきた。

一六　あの志賀の浜辺の松も年老いたことだ。

『新体系』の脚注は、一〇を「この一首『若草』」として「若菜」の歌群から除外している。

しかし一〇・一一・一二の三首は、先の配当と組合せが示しているように、「春日野」―「野」―「春日野」／「したもえわたる草」―「若菜つまむ」―「若菜つまむ」―「草」という共通の語句で連鎖している。

このうち、一〇の「したもえわたる草」について少し立ち入って見ると、この「草」の中には「若菜」も含まれている。しかし何分にもまだ「したもえ」の状態にあって人目につかない。

次の一一には「若菜つまむ」とあるが、これは「昨日も今日も」降り続いている雪の下にある「若菜」を想像しながら、二・三日前に、「あすからはつまむ」と思ったのである。

一二で「草」はやっと「みどり」になり、その「草」の中の「若菜」も見分けがつくようになった。そこで、さあいよいよ「若菜つまむ」ということになったのである。

このように一〇・一一・一二の三首は、「したもえわたる草」「若菜」「草」という共通の語句によって、形式的にも内容的にも互いに連鎖しながら、春雪の頃の時間的推移に沿って整然と配列されている。

『新大系』の脚注には、〔歌群の主題を示す語句〕と〔その他の共通語句〕という共通の語句による歌の連鎖というような視点はなく、一〇・一一・一二をばらばらに切り離して観察し、一〇には「したもえわたる草」という語句はあるが「若菜」は見当たらないので、一〇を一一以下の「若菜」の歌群とは別の「若草」の歌と見たのであろう。

一五は若菜にちなんだ述懐の歌。一六も、初子の日にちなんだ述懐

の歌である。それに、この日は不老長寿を願い野外に出て小松を引いて常磐の松にあやかろうとしたが、同時に若菜も摘んだので、この一六を「若菜」の歌群に入れたと考えられる。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

一六　さざ浪　子の日
一七　浪　春

(三)「谷の鶯」の歌群(一七―一八)の構造

一七　谷河のうちいづる浪もこゑたてつ鶯さそへ春の山風
一八　鶯のなけどもいまだふる雪に杉の葉しろき逢坂の山

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕　〔その他の共通語句〕

一七　春／鶯さそへ　……　山風　こゑたてつ
一八　鶯のなけども　逢坂の山

一八の「鶯」は、この歌群では、一七の「春の山風」の吹く谷にいる「鶯」を意味する。

なお、右の上段と下段の傍線は共通の語句であることを示す。以下同じ。

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

一七　谷河のうちいづる浪もこゑたてつ鶯さそへ春の山風
一八　鶯のなけどもいまだふる雪に杉の葉しろき逢坂の山

歌群の大意

一七　谷河の氷の割れ目からほとばしる波も声を立てたことだから、谷で鳴いている鶯を誘いだしておくれ、春の山風よ。
一八　(それはそうだが、しかし何分)杉の葉はまだ白いままだから、あなたが鳴いているという鶯のいる逢坂山は。

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(4)

一七と一八は、ここでは贈答歌の形で配列されている。この「谷の鶯」の歌群は、後にでてくる「梅が枝の鶯」の歌群(二八―三二)の前段階に位置している。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

一八　ふる雪　杉の葉　逢坂の山
一九　あは雪ぞふる　松のうは葉　片岡

(四)「春雪」の歌群(一九―二四)の構造

一九　春きては花とも見よと片岡の松のうは葉にあは雪ぞふる
二〇　巻向の檜原のいまだくもらねば小松が原にあは雪ぞふる
二一　いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春日となりにしものを
二二　いづれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまだきえぬ雪

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕　〔その他の共通語句〕

一九　春きては／あは雪ぞふる　……　松　花とも見よ
二〇　あは雪ぞふる　小松が原
二一　春日／いまさらに雪ふらめ　春日の原　花とはわかむ
二二　まだきえぬ雪

一九と二〇、二一と二二がそれぞれ対として配当された。

〔歌の配列順を示す一連の語句〕

配列

一九　春きては花とも見よと片岡の松のうは葉にあは雪ぞふる
二〇　巻向の檜原のいまだくもらねば小松が原にあは雪ぞふる
二一　いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春日となりにしものを
二二　いづれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまだきえぬ雪

歌群の大意

一九　春がきたからには、これを花と見よとばかりに、片岡の松の上葉に淡雪が降っている。

二〇　（しかし）巻向の檜の林はまだ曇ってもいない。

二一　かげろうのもえる春日になったというのに。

二二　（梅の花と淡雪と）どちらを花と見分けようか。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

二二　春日　雪

二三　春　雪げ

（五）「余寒の月」の歌群（二三―二四）の構造

二三　空はなをかすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月

二四　山ふかみなをかげさむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕　〔その他の共通語句〕

二三　春の夜の月／雪げにくもる ……　空／かすみもやらず　風さえて

二四　春の月／雪はふりつゝ ……　空かきくもり　さむし

二三と二四が対として配当された。二四の「春の月」は、ここでは二三の「春の夜の月」を意味している。

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

二三　空はなをかすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月

二四　山ふかみなをかげさむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ

歌群の大意

二三　風が冷たくて雪の降りそうな空模様のため、春の夜の月が曇っている。

二四　空が急に曇って雪が降ってきた。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

二四　春　雪

二五　春風　霜

（六）「水郷春望」の歌群（二五―二七）の構造

二五　三島江や霜もまだひぬ蘆の葉につのぐむほどの春風ぞ吹

二六　夕月夜しほみちくらし難波江の蘆の若葉にこゆる白浪

二七　ふりつみし高嶺のみ雪とけにけり清滝河の水の白浪

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕　〔その他の共通語句〕

二五　春風／蘆の葉 ……　三島江

二六　蘆の若葉／ ……　難波江　白浪

二七　高嶺のみ雪とけ ……　清滝河　白浪

まず二五と二六が対として配当され、この二首に二七が追加された。

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

二五　三島江や霜もまだひぬ蘆の葉につのぐむほどの春風ぞ吹

二六　夕月夜しほみちくらし難波江の蘆の若葉にこゆる白浪

二七　ふりつみし高嶺のみ雪とけにけり清滝河の水の白浪

歌群の大意

二五　三島江の、霜もまだ乾かぬ蘆の枯れ葉に、若芽が角ぐむほどの春風が吹いて、

二六　（今や）蘆の若葉には白波が寄せてきて越えている。

二七　（あの白波は）清滝河から流れこむ雪解け水のせいなのだ。

二五の「三島江」は、現在の大阪府高槻市三島江町一帯の地で、淀川の右岸にある。二七の「清滝河」は、京都市右京区嵯峨愛宕町の愛

宕山の麓を通り保津川に注ぐ清流で、三島江からはかなり離れている。この歌群は僅か三首からなるとはいえ、かなり広範囲の地域を脳裏に描いたものになっている。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

二七　ふりつみし・み雪
二八　ちる雪

（七）「梅が枝の鶯」の歌群（二八―三二）の構造

二八　梅が枝にものうきほどにちる雪を花ともいはじ春の名たてに
二九　あづさ弓はる山近くいゑゐしてたえずき、つる鶯の声
三〇　梅が枝になきてうつろふ鶯の羽根しろたへにあは雪ぞふる
三一　鶯の涙のつら、うちとけて古巣ながらや春をしるらん
三二　岩そ、くたるみのうへの早蕨のもえいづる春になりにけるかな

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕

二八　春／梅が枝
二九　はる山／鶯の声
三〇　梅が枝／なきてうつろふ鶯
三一　春／鶯／つら、うちとけ
三二　春になりにけるかな

〔その他の共通語句〕

古巣
岩そ、くたるみ

『新体系』の脚注は、二八が、三〇と同じく「梅が枝」と「雪」をもっている点に着目して、二八は「残雪」を主題とした歌であり、二九の次ぎの三〇との「繋ぎであろう」と指摘している。しかし『古今集』や『新古今集』では、歌群を繋ぐ場合、中に一首を挟んで間接的に繋ぐことはない。

ここでは、まず「梅が枝」を共通にもっている二八と三〇とが対として配当され、この二首に二九が追加され、次いで三一と三二が対として配当されたと考えられる。

なお、三一の「鶯」の「古巣」は山奥の谷間にあり、この歌群の中では、次の三二の「岩」は、この谷間の「岩」を意味している。

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

二八　梅が枝にものうきほどにちる雪を花ともいはじ春の名たてに
二九　あづさ弓はる山近くいゑゐしてたえずき、つる鶯の声
三〇　梅が枝になきてうつろふ鶯の羽根しろたへにあは雪ぞふる
三一　鶯の涙のつら、うちとけて古巣ながらや春をしるらん
三二　岩そ、くたるみのうへの早蕨のもえいづる春になりにけるかな

歌群の大意

二八　梅の枝に、もう春だというのにうんざりするほど雪が降っているが、この雪を花などとは言うまい。春のよくない評判を立てることになるから。
二九　（近頃）絶えず鶯の声を聞くようになった。
三〇　（あっ。庭先の）梅の枝に鳴きながら鶯が移っていく。
三一　（あの鶯は）谷間の古巣にいながらにして春を知るのであろうか。
三二　（鶯が飛び去った後の谷間では）春になって、岩に注いでいる辺りに初蕨が萌え出ていることだろう。

『新体系』の脚注は、二八の主題は先の一九同様「『残雪』といってよい」と指摘している。しかしこの指摘は、二八を次の二九と切り離し、一首だけを観察したことによる。

梅は、上代に中国の華南から渡来し、主に貴族の邸宅で賞翫され、白梅の白さを雪に見立てたり梅と鶯を取り合わせるのも、中国文学の

影響による。

二八の作者は源重之で、彼は、梅が枝の雪を梅の花と見立ててこの歌を詠んでいる。

しかし二八の次の二九で、「はる山近くいゐゐしている」ところへ、すでに「鶯の声」が絶えず聞こえている。二八と二九は、この歌群の中では、「梅が枝」―「鶯」（縁語）、「春」―「はる山」という共通の語句によって連鎖している。

二八は、もともとは「梅が枝」に「雪の花」が咲いているとは言うまい、「春の名立てに」という意味の歌であり、この歌一首だけを取り上げるなら、このように解釈して何ら問題はない。

しかしこの歌群の中では、もう春だというのに、「梅が枝」に春の到来を告げる鶯の姿は見えず、ただうんざりするほどの雪の花が散っているだけである。「梅が枝」に雪の花―これでは「春の名立てに」ならないので、そうは言うまいという意味に変化している。

ところで二九では、「鶯」の声は「はる山」の方から聞こえるがまだ姿は見えない。

三〇で、やっと「梅が枝になきてうつろふ鶯」が姿を見せる。

三一では、編者は、一転して思いを「古巣ながらや春をしる」鶯に寄せている。

最後の三二は、早春の歌として人口に膾炙しているが、この歌群の中では、たんなる早春の歌としてではなく、鶯が飛び去った後、垂水の音だけがかすかにきこえるような静けさと早蕨が萌え出る暖かさに包まれた早春の「古巣」に思いを馳せている歌として、歌群の末尾に織り込まれている。

庭先の梅の枝に雪だけが降り積もっている。

鶯は、声は聞こえるがまだ山の方にいる。

鶯が庭先にやってきて鳴きながら梅の枝を伝っている。

梅が枝に来る前、古巣の谷間にいた時の鶯。

鶯が飛び去った後の早春の谷間。

この歌群では、歌が早春の推移と鶯の移動に沿って配列されている。『新体系』の脚注は、ここでも共通の語句による歌の連鎖という視点を欠いており、三一・三二の二首を二八・二九・三〇の三首とは別の、「共に谷間の早春」を詠んだ歌と見ている。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

三一　春になりにけるかな
三二　春の色の霞

以上、「立春」から「梅が枝の鶯」に至る七つの歌群の構造について考察したが、その内容は、「予備的考察」（2）で考察した『古今集』巻頭の三つの歌群の場合と基本的に同じである。このことを確認して次に、『新古今集』の歌を、共通の語句という視点だけから観察する織田説の検討に移る。

三　『新古今集』の歌群の構造に関する織田説の検討

（一）織田説の問題点

織田説によると、「百人一首」の歌が互いにもっている共通の語句には二種類あるが、それは、定家が、

「『百人一首』の撰歌に、語句の同意的関連と反意的関連という二つの撰歌基準を用いている」（『謎の歌集』一〇四頁）

ことによるとして、次のような例が挙げられている。（五八―七一頁）

〇同一の語句による関連（同意的関連）の例

わが衣手

一　秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつゝ

一五　君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつゝ

ひとりかも寝む

三　あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ
九一　きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む

○反意語による関連（反意的関連）の例

衣手ぬれ・衣ほす

一　秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつゝ
二　春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

物思ふ・物思はざり

九九　人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は
四三　逢ひ見てののちの心にくらぶればむかしは物を思はざりけり

織田氏はさらに、

「関連する語句を持つ歌を合わせて配列するのは、勅撰集に見られることである。『新古今集』も同意的関連と反意的関連によって歌を配列している部分がある。『百人一首』を関連する語句によって再配列した場合、連鎖のパターンは『新古今集』の配列のパターンと一致する。」（同前）

と述べ、同一の語句による関連を裏付ける例として、『新古今集』「春歌上」五五―六〇の六首（※印）を挙げ、その状況を次のように摘記されている。（□と傍線―今川）

五五　おぼろ月夜　春の夜
五六　おぼろ　春の夜　霞
五七　おぼろ月夜　霞み
五八　おぼろ月夜　雁　あけぼのの空
五九　帰る雁　あけぼのの空　きく
六〇　帰るかりがね　声きこゆ

右に摘出された同一の語句には、いくつかの問題点がある。

一つは、歌群という場合、『古今集』や『新古今集』では、まず〔歌群の主題を示す語句〕を基準にして、原則として主題が同じ歌によって構成される。ところが右の六首の歌群は、ただ単に同一の語句という基準だけで選ばれた歌で構成されているため、〔歌群の主題を示す語句〕と〔その他の共通語句〕とが区別されないまま混在していることである。

二つ目の問題点は、織田説には〔歌群の主題を示す語句〕という基準がないため、ここでは主題の異なる歌群が混在していて、『古今集』や『新古今集』に見られる本来の歌群の態をなしていないことである。摘出された同一の語句の多さから見て、「おぼろ月夜」と「帰雁」が〔歌群の主題を示す語句〕であり、五五―五八が「おぼろ月夜」の歌群であり、五八―六〇が「帰雁」であると推定できる。

三つ目の問題点は、しかし五八がどちらの歌群に所属するかが曖昧であるため、二つの歌群の区分ができないことである。

四つ目の問題点は、『新古今集』の六一―六三の三首が「帰雁」を主題とする歌であるにもかかわらず、右の六首には含まれていないことである。

そこで次に、五五―六〇の六首に六一―六三の三首を加えた九首を、「おぼろ月夜」と「帰雁」の二つの歌群に分け、それぞれの構造について考察することにする。

（二）「朧月夜」の歌群（五五―五七）の構造

五五　てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき
五六　あさみどり花もひとつに霞みつゝおぼろにみゆる春の夜の月
五七　難波潟かすまぬ浪も霞みけりうつるもくもるおぼろ月夜に

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕〔その他の共通語句〕

五五　春の夜のおぼろ月夜
五六　春の夜の月／おぼろ　霞みつゝ
五七　おぼろ月夜　霞みけり

五五と五七は、ともにこの歌群の主題を直接示す「おぼろ月夜」と

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（4）

いう共通の語句をもっており、内容も類似しているところから推して、まずこの二首が対として配当され、この二首に五六が追加されたと考えられる。

但し、五五と五六とは「霞みつつ」「霞みけり」という共通の語句をもっているので、実際の手続きとしては、まずこの二首が対として配当され、後から五五が追加されたというケースも考えられる、

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

五五　てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき

五六　あさみどり花もひとつに霞みつゝおぼろに見ゆる春の夜の月

五七　難波潟かすまぬ浪も霞みけりうつるもくもるおぼろ月夜に

歌群の大意

五五　照りもせず曇ってしまうでもない春のおぼろ月夜の風情に勝るものはない。

五六　薄藍色に霞のかかった空に、花も霞み、

五七　難波潟の霞むはずのない波も霞んでいる。

この歌群は、先頭の五五の内容を、空から海へと視線を移しながら展開したものと見ることができる。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

五七　おぼろ月夜

五八　おぼろ月夜

『新体系』の脚注は、五八について、「これは前の『朧月夜』群と次の五九から六一に至る『帰雁』群とを繋ぐ歌で、巧緻な配置を示す。」と指摘し、五八は前後の歌群から独立し、一首で繋ぎの役割を果たしていると見ている。しかし五八の主題は、春になりやがて北国帰る「たのむの雁」である。したがって、「帰雁」の編者は、この五八を、同じく「帰雁」を主題とする五九―六三の五首の先頭に置いて、前の歌群との繋ぎの役を果たさせたのである。

（三）「帰雁」の歌群（五八―六三）の構造

五八　いまはとてたのむの雁もうちわびぬおぼろ月夜のあけぼのの空

五九　きく人ぞ涙はおつる帰る雁なきてゆくなるあけぼのの空

六〇　ふるさとに帰るかりがねさよふけて雲路にまよふ声きこゆなり

六一　わするなよたのむの沢をたつ雁も稲葉の風の秋の夕暮

六二　帰る雁いまはの心ありあけに月と花との名こそおしけれ

六三　霜まよふ空にしほれるかりがねの帰るつばさに春雨ぞふる

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕〔その他の共通語句〕

五八　たのむの雁　あけぼのの空

五九　帰る雁　あけぼのの空　なきてゆく

六〇　帰るかりがね　雲路　声きこゆ　さよ　夕暮

六一　たつ雁　ありあけ

六二　帰る雁

六三　かりがねの帰るつばさ　空

まず五八と五九の二首が対として配当され、この二首に六〇が追加され、次に六二と六三が対として配当され、これに六一が追加されたと考えられる。但し、五八と六一はともに「たのむの雁」という語句をもっているので、最初にこの二首が「帰雁」の歌群に配当されたとも考えられる。

しかしいずれにしても、この歌群は、第一陣（五八―六〇）と第二陣（六一―六三）の二つの「帰雁」のグループの歌からなっており、末尾に定家の名歌の一つ六三を置き、「霜まよふ空」を、今ややわらかに降る春雨を翼にあびて帰っていく雁を見送るという形で、この歌群を締めくくっている。

『新体系』の脚注は、六三も、先の五八と同様、「帰雁」と「春雨」の歌群の間で独立した一首として繋ぎの役割を果たしていると指摘している。しかし六三の主題は、冬の間は霜の乱れ降る空でしおれていた「帰雁」の翼にあり、その翼に今はやわらかく春雨が降っているのである。したがってこの六三は、「帰雁」の歌群の末尾にあって、次の「春雨」の歌群へ繋いでいると見るのが適当である。

配列（歌の配列順を示す一連の語句）

五八　いまわとてたのむの雁もうちわびぬおぼろ月夜のあけぼのの空

五九　きく人ぞ涙はおつる帰る雁なきてゆくなるあけぼのの空

六〇　ふるさとに帰るかりがねさよふけて雲路にまよふ声きこゆなり

六一　わするなよたのむの沢をたつ雁も稲葉の風の秋の夕暮

六二　帰る雁いまはの心ありあけに月と花との名こそおしけれ

六三　霜まよふ空にしほれしかりがねの帰るつばさに春雨ぞふる

歌群の大意

五八　いよいよ発つ時になったというので、別れを惜しんで田の面の雁もわびしく鳴いている。空には朧月が残り夜がほのぼのと明けようとしている。

五九　（その空を、今や）帰っていく雁が鳴きながら飛んでいく。

六〇　夜がふけて、空で道に迷っている声が聞こえてくる。

六一　忘れないでくれよ頼むから。（これから）田の面の沢を飛び立っていく雁たちも稲葉を風が吹いているこの秋の夕暮を。

六二　月も花も、帰っていく雁の心をいまさらひきとめられないなあ。

六三　帰っていく雁の翼に春雨が降っている。

この歌群は、帰る雁を詠んだ歌を第一陣と第二陣に分けた上で、さらに時間の経過にそって配列している。

（次の歌群との連鎖を示す語句）

六三　春雨

六四　春のながめ

織田氏は、『新古今集』の四季の巻の中から反意的関連の事例もいくつか挙げておられるが、いずれも断片的なものにすぎないので、代りに、氏が「恋歌一」の中から引用しておられる一〇七一―一〇七五の五首を採りあげ、簡単に見ておくことにしたい。

（四）「舟に寄する恋」の歌群（一〇七一―一〇七五）の構造

一〇七一　由良の戸をわたる舟人かぢをたえゆくゑもしらぬ恋の道かも

一〇七二　追風に八重の潮路をゆく舟のほのかにだにも逢ひ見てしかな

一〇七三　かぢをたえ由良のみなとによる舟のたよりもしらぬ沖の潮風

一〇七四　しるべせよ跡なき浪にこぐ舟のゆくゑもしらぬ八重の潮風

一〇七五　紀の国や由良のみなとに拾ふてふたまさかにだに逢ひ見てしかな

織田氏は、右の五首を、「同一の語句が連接し、あるいは一首おきに配置され」ており、一〇七二と一〇七三では、「『潮路をゆく舟』と『みなとによる舟』が出航と帰港という反意で関連している」（同前七八頁）歌群の例として挙げておられる。□と傍線―今川。

一〇七一　由良　舟人　かぢをたえ　ゆくゑもしらぬ

一〇七二　潮路をゆく舟　逢ひ見てしかな　八重の潮路

一〇七三　由良　みなとによる舟　かぢをたえ　たよりもしらぬ　潮風

一〇七四　浪にこぐ舟　ゆくゑもしらぬ　八重の潮風

一〇七五　由良　みなと　逢ひ見てしかな

しかし、『新古今集』の歌の配当と組合せの基準に照らすと、右の五首は、いずれも「逢恋」の歌群に配当されたものであり、共通の語

句による連鎖の実態は、次に示すように織田氏の見解とはかなり違っている。

配当・組合せ

〔歌群の主題を示す語句〕　〔その他の共通語句〕

一〇七一　ゆくゑもしらぬ恋のみち……舟人　かぢをたえ　由良の戸

一〇七二　ほのかにだにも逢ひ見てしかな

舟　追い風・八重の潮路

一〇七三　たよりもしらぬ……舟　かぢをたえ　由良のみなと

沖の潮風

一〇七四　ゆくゑもしらぬ／しるべせよ……舟　八重の潮風

一〇七五　たまさかにだに逢ひ見てしかな　由良のみなと

配当と組合せは、〔歌群の主題を示す語句〕を第一の基準として判断すると、まず一〇七一と一〇七四に一〇七三が追加され、次に一〇七二と一〇七五が対として配当され、それぞれ一〇七一と一〇七四と組み合わされたのではないかと考えられる。

配列　〔歌の配列順を示す一連の語句〕

一〇七一　由良の戸をわたる舟人かぢをたえゆくゑもしらぬ恋の道かも

一〇七二　追い風に八重の潮路をゆく舟のほのかにだにも逢ひ見てしかな

一〇七三　かぢをたえ由良のみなとによる舟のたよりもしらぬ沖の潮風

一〇七四　しるべせよ跡なき浪にこぐ舟のゆくゑもしらぬ八重の潮風

一〇七五　紀の国や由良のみなとに拾ふてふ

たまさかにだに逢ひ見てしかな

歌群の大意

一〇七一　由良の川口を渡る舟人が梶を失い、舟をどこへ漕いでいったらいいのか分からないような私の恋だなあ。

一〇七二　ほんのわずかでもいいから、あの人に逢いたい。

一〇七三　（だけど）あの人に近づくすべも分からない。

一〇七四　手引きがほしい。

一〇七五　ほんのたまにでもいいから、あの人に逢いたい。

この先どうなっていくのか皆目見当もつかない恋の道行きの中で、次第に高まっていく逢う瀬を願う心にそった配列になっている。

〔次の歌群との連鎖を示す語句〕

一〇七五　たまさかにだに逢ひ見てしかな

一〇七六　つれもなき人

参照文献―本文で引用したものを除く―

久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎校注

『新古今和歌集』日本古典文学大系　一九五八年

久保田淳　『新古今和歌集全評釈』第五巻　講談社　一九七七年

久保田淳校注

『新古今和歌集』上下　新潮日本古典集成　一九九五・九八年

後藤重郎　『新古今和歌集の基礎的研究』塙書房　一九六八年

日本文学研究資料刊行会編

『新古今和歌集』有精道　一九八〇年

和歌文学論集編集委員会編

『新古今集とその時代』風間書房　一九九一年

後藤重郎　『新古今和歌集研究』風間書房　二〇〇四年

二〇〇六・一二・二六／完

（元東海女子高校教諭）